

長岡市・関係団体共同記者発表要旨

日 時：令和2年4月1日（水）午後2時から

会 場：アオーレ長岡東棟4階 大会議室

【発表項目：大手通坂之上町地区第一種市街地再開発事業C街区

「エール長岡クリニック」開業共同記者発表】

出席者：長岡市長 磯田 達伸

医療法人メディカルビットバレー	理事長	澁谷 裕之
	理 事	苅谷 直之
	理 事	伊藤 朋之
	理 事	鈴木竜太郎
	医 師	藤本 篤

（長岡市長）

現在、都市再生機構が進めている大手通坂之上町地区市街地再開発事業C街区の、駐車場棟の1階に進出を予定されている、医療法人メディカルビットバレーが運営するエール長岡クリニックの開業について発表します。

今回の開業については、北越銀行と締結した地域密着型包括連携協定に基づいたビジネスマッチングによりクリニックの進出が実現しました。

多数の医師が勤務することに加えて、休日、夜間の診療も実施し、市街地に居住する方や勤務されている方にとって身近な医療機関として、新しい医療サービスを提供していただけると聞いています。

さらに、人工知能AIを使った画像解析診断システムや、遠隔地の患者も診察できるシステムの開発をお考えとのことで、長岡版イノベーションの動きの中で、新しいタイプのクリニックとして羽ばたいていただけるのではないかと考えています。本地区での開業が中心市街地の居住環境、子育て環境の向上、そして雇用の創出に大いに寄与していただけると期待しています。

（副市長）

進出いただいた経緯や再開発事業等との連携について概要を説明いたします。

今回進出していただきますC街区では、現在の北越銀行の北側の駐車場を、立体化をして1階に床をつくり、そのテナントを募集してまいりました。

幾つか問い合わせはありましたが、協議の結果、最終的な入居に至りませんでした。その中で、北

越銀行とのビジネスマッチングによりクリニックの出店の協議をさせていただきました。

今回の市街地再開発地区は、人づくり、産業振興の拠点となった米百俵のまち長岡の国漢学校の跡地を開発します。今回の医療法人では、AIを活用した医療、例えば皮膚科の診療、治療で、患部の皮膚を画像で見て、その的確な診断を遠隔で行えるような、新しい効果的な医療ができていくということでもあります。これは長岡が進めておりますAIのイノベーション、そして今回の米百俵プレイスに入ります3大学1高専との連携という面でも親和性のある施設と考えております。

ちなみに、澁谷先生は地元長岡高校のご出身で、長岡技大や長岡高専とも積極的に関わって、米百俵プレイスのプログラムに医療機関として参加いただけることになり、非常に歓迎しているところがございます。

この再開発は、市民に喜ばれる施設にしたいと考えています。再開発の一番最初に整備される床の部分で、医療機関という市民にとって最も頼りになる機能が導入できたということは、事業に弾みがつくものとして非常に期待しています。

また、地方の医師不足が叫ばれる中で、若い先生方が県外から長岡に来ていただけるということも、私ども長岡市としては非常に歓迎しているところです。

(理事長)

メディカルビットバレーの参画を決断された医師の紹介および市街地に新たに開業するエール長岡クリニックのコンセプトや特徴、思いなどを説明します。

まず、メディカルビットバレーのメンバーを紹介します。

荻谷直之先生は、皮膚科の担当で、このたびエール長岡クリニックの院長を務めます。

伊藤朋之先生は、リウマチ膠原病内科の担当で、下柳地内に開業する1軒目のエールホームクリニックの院長をしていただきます。

鈴木竜太郎先生は、小児科の先生です。

藤本篤先生は、皮膚科の担当で、AIの開発を行います。

次にメディカルビットバレーという医療法人の設立について説明します。

まず、3月27日に医療法人として認可をいただきました。

目的は、まずは医師偏在化問題、そして地方の医師不足という問題を解決したいということが一番です。私自身長岡出身で、地方の医師不足と聞かたびに寂しい思いが強くありました。それと、私は総合診療医ですので、医療を通じて社会問題を解決するというのが大きなテーマでした。そういったことが重なって、このたび仲間を呼んで、この長岡という地で医師を集めて、そして育てるということを目指しております。

集め方とかもいろいろあると思うんですけども、私たちのモットーは、「好きな仲間と好きな場所で楽しくワクワク仕事して、最高の業績をあげる」ということです。そうして1年で約10人の先生が日本全国から集まりました。平均年齢は39歳で、子育て世代の女性の医師が2人います。

次に、エール長岡クリニックについて説明します。2022年の春から長岡市の再開発事業に入れていただくことになりました。10人で2つのクリニックを回すのですが、そのコンセプトとして、まず第1に、ワンフロアで強力なチーム診療を行うということがあります。ワンフロアというのは、約2,000平米の大きさの中に複数の医師、複数診療科などが入るわけですが、私たちはすごく仲間意識が強く、好きな仲間でやるということコンセプトに掲げていますので、チームワークが大変強いです。10人でもそれ以上の効果を生み出すことができます。

そして、良いチームワークで運営するクリニックの空気を、今回の再開発事業から長岡市全体に広げて、プラスの考え、プラスの雰囲気大きく広げていきたいと思えます。クリニックのスタッフみんなが同じ視点に立って、クリニック、そして市街地を良くして、長岡市も良くするという概念に立っています。

次に、市民ニーズに応えることです。診療時間を朝9時から夜9時まで、連続した外来を内科、皮膚科、小児科で行います。私たちは一番働き盛りの方に医療を受けてほしいと思えます。健康診断を受けても仕事が忙しくてなかなか医療を受けられない方がたくさんいらっしゃると思えますが、そういった方が仕事を休まずに、仕事帰りにしっかり健康管理をしていただくことが健康寿命に影響すると考えております。

小児科を夜やることによって、お母さん方が仕事を休まず予防接種を受けることができるようなシステムをつくっていきたくと思えます。やはり仕事を休まずに医療を受けることができる環境をつくって初めて医療が市民の生活に溶け込んだと言えらると思えます。

次に、臨床研究や人材育成です。10人で始めますが、中には第一線で臨床研究をしている先生がたくさんいます。診療だけではなく学問的な分野でもしっかりとやっていかななくてはと思えます。このクリニックを続けていくために、私たちを継いでくれる若手の医師をしっかりと育てていきたくと思っております。

次が女性活躍の推進です。これがとても今大事です。クリニックは看護師や女性医師など、女性が多く働く領域です。出産や育児をしながら働くことができるよう、しっかり取り組んでいきたくと思えます。

最後に、最新医療技術の開発です。長岡市のイノベーション政策とともに一生懸命、民間企業や、大学と組んで、AI開発を進めて、長岡市のブランド力の向上にも役に立っていきたくと思っております。

(記者)

澁谷さんが今までどのような医療活動をされてきたのか、ご自身の略歴を含めて教えてください。

(理事長)

弘前大学の医学部を出た後に、研修医を終わって、山形、秋田で総合診療科として働いて、その後4年前に故郷の長岡に戻り、急性期病院に就職しました。そのときは、総合診療科をやっておりまし

た。地方の医師不足ということの中でテーマに掲げていまして、そのやり方を考えたときに、自分の信頼のある個人的なつながりの先生たちを呼び、みんなでゼロからつくり上げるという気持ちで始めました。

(記者)

10人は全国のどの地域から集まるのか教えてください。

(理事長)

東京、神奈川、東北地方です。

私は新潟県出身で、あと全員県外出身者です。

(記者)

医師不足の中、9人も医師が長岡に来るということに対してご感想をお願いします。

(市長)

驚きです。澁谷先生を中心に多くの若い医師が全国から長岡に来てくれるというのは、素晴らしいと感じます。また、チーム医療という、今までなかった新しい取り組みが、長岡でスタートすることも本当に光栄に思います。

(記者)

澁谷先生は総合診療をなさっていたということですが、長岡で診察する患者はどのような病状の方でもまずは澁谷先生が診察をして、ここのクリニックでできない方でも他のところに紹介することもお考えでしょうか。

(理事長)

そうです。しっかりとした診診連携や病診連携を通じて長岡全体の医療レベルを上げていくための存在になりたいと思っています。急性期病院と個人の開業医との間の位置で新しい価値をつくり出していきたいと思っています。

(記者)

急性期病院と個人の開業医との間の価値とは具体的にどういうことですか。

(理事長)

個人のクリニックでは難しい診断と治療を私たちが行い、入院の適応をしっかりと判断するクリニックを目指します。また、急性期病院は夜9時までには8割方の患者が来る中で、私たちが夜9時までやることによって急性期病院の勤務医の負担を減らしたいということが大きな役割だと思っています。

(記者)

大学で研修医を終わられた方たちを受け入れて育成することも考えていますか。

(苅谷理事)

研修医の育成については、学会の専門医等からの認定など、これから調整して、つくり上げていき

たいと思っています。

(記者)

エールホームクリニックとエール長岡クリニックの二つの役割分担はございますか。

(理事長)

エールホームクリニックは長岡市の江陽地区で地元の住民の方を中心とした地域医療を行います。小児科と内科と皮膚科とリウマチ、膠原病科と複数の科で行います。

エール長岡クリニックは、かなり高い診療レベルで、例えば皮膚科であれば、手術まで行うとか、リウマチ、膠原病科だったら最先端診療まで行うなどのすみ分けを考えています。

(記者)

エールホームクリニックの診療時間をお聞かせください。

(理事長)

月曜日から金曜日の朝8時30分から夜6時までです。

(記者)

遠隔医療について、詳しく教えてください。

(藤本医師)

私はAIの開発ということで携わらせていただこうと思っています。遠隔診療とは別です。

(記者)

AI診断について詳しくお聞かせください。

(藤本医師)

皮膚の病気の診断をアシストする医療機器を開発して製品化したいと考えております。直接診断するというと、保険診療的な問題が絡んでくるのでアシストする医療機器を考えています。

(記者)

例えば皮膚の疾病状態の画像から、機器が幾つか示唆してくれて、その中から医師が判断できるようなイメージですか。

(藤本医師)

そうです。皮膚科医個人の経験と勘によるところが大きい分野を皮膚の状態の画像から診断候補を絞るといったところをアシストできるような機器をつくりたいと考えております。

(記者)

エール長岡クリニックの医師、看護師含めたスタッフ総勢の人数を教えてください。

(理事長)

エールホームクリニックとエール長岡クリニックで医師を順番に回すということを行います。1人の患者に1人の医師ではなくて、多くの医師が1人の患者を診ることによって見落としがなくなる、そして標準的な治療をしっかりとできます。エール長岡クリニックも10人で診ます。看護師は、15から20人

と思っております。

(記者)

その雇用は地元からとお考えですか。

(理事長)

できる限り長岡市の方をと思います。

(記者)

診療時間は、内科と小児科と皮膚科が平日 9時から21時までで、リウマチとアレルギー科は日中だけということですか。

(理事長)

リウマチ科は、予約外来が中心になりますので、基本的には日中です。アレルギー科は、皮膚科と同じ診療時間です。

(記者)

中心市街地にこういったクリニックができることについて、市長はどのように評価されますか。

(市長)

中心市街地では、空き店舗と医療機関の問題は両方とも支えていく必要があると思っています。エール長岡クリニックは新しい機能として医療全体のレベルを上げるための触媒のような役割を担っていただけていると思っております。中心市街地は広い長岡のネットワークの中心という位置づけがありますので、医療のネットワークの中心を担っていただければ、中心市街地にふさわしい医療機関になっていただけていると思います。

(記者)

長岡の医療は、現在長岡赤十字病院、中央総合病院、立川総合病院が中心となっており、長岡赤十字病院は3次救命で非常に大きな病院です。それだけ大きな箱がある中で、臨床研究でしたり、人材育成という部分にも力を入れていくというのは、どのような背景があつてのことでしょうか。

(苅谷理事)

エールクリニックは10人の専門医の集団ですので、専門性の高い医療を提供することでクリニックとして市民のニーズに応えながら、クリニックの実績を積み上げていくことが大前提です。また、指導もできるレベルの医師がそろっていますので、実績を積み重ねた結果として、臨床研究を行っていきたいと思います。今回のリウマチ科の医師は、臨床研究のトップランナーの実力があります。医師や患者の数が多いいクリニックだからこそ積み重ねた実績を生かしたいと思っています。

人材育成に関しても、実績の積み上げからになると思いますが、関係組織と連携して、研修医を指導できるような環境を整えて、エールクリニックとして臨床研究の認定施設を取ることを目標にしています。

(記者)

駅前の立地で、患者が多いからこそ疫学的にデータも多く取れるということでしょうか。

(荻谷理事)

そうです。

(記者)

AIでの画像認識は既に開発されているソフトを使うということですか、それともこれから開発するということですか。

(藤本医師)

AI関連では、既に幾つかアプリケーション開発はされております。ただ、私はもっと汎用性のあるもので、疾患を限定しないようなものをつくりたいと考えておまして、それについては私が知る限りではまだ実用化されたものはありません。

(記者)

例えば長岡技科大や長岡高専との連携というのは考えていますか。

(藤本医師)

私がこのプロジェクトに魅力を感じた点は、パートナーである長岡市との密なネットワークを活用させていただいて、長岡技科大や長岡高専、あるいは長岡市内の企業などと連携できるということです。

現状のAI開発では、商品化、製品化でボトルネックになる面があり、そういったところを長岡市と協力して解決できればと考えています。

(記者)

遠隔診断の拠点となり得るということですが、スマートフォンで撮った写真を見て診断するということですか。

(藤本医師)

まず画像データなどを集積するため皮膚の写真撮るような器具、機器をつくることからということになります。

遠隔診断につながるのはまだ先だと思っております。

(記者)

澁谷先生にお伺いします。今回の開業に至る経緯として、既に何らかの形で医療法人を設立して開業したいと思っているところに話があったという認識でよろしいでしょうか。

(理事長)

そのとおりです。

(記者)

中心市街地に魅力を感じたということでしょうか。

(理事長)

とても魅力を感じました。人を集めて育てるということはとても意義のあることだと思うので、チャンスだと思いました。

(記者)

長岡の中心市街地を紹介される前からこの規模を考えていらっしたのでしょうか。

(理事長)

この話を聞いたときは、私と苅谷先生と伊藤先生と鈴木先生の4人でしたので、その後約半年で6人集まりました。